

テレカコレクション

【 第31回 タバコ編 】

健

今回、紹介するジャンルは「タバコ」である。



今やすっかり悪者になってしまった感のあるタバコ。シンガポールでの喫煙禁止は特に厳しいものがあるが日本でも条例が厳しくなる一方で喫煙できる場所がどんどん排除されている。自分としては隣で吸われても気にならないが健康問題を盾にされると喫煙賛成というわけにもいかない。長年、在籍した職場を異動になり総務を担当することになり2年。職場の安全衛生管理も仕事の一つとなると禁煙を推進する立場にならざるを得ない。

一方、喫煙者への配慮も必要でタバコを吸う場所のセッティングやらマナーの徹底やらこれでなかなか大変なものがある。自分はタバコを吸わないが禁煙運動もここまでくると気の毒になるほどだが喫煙者のマナーの悪さも目に余るものがあるので自業自得の部分もある。

自分の場合、置きタバコや消し忘れなど火の元に注意してさえくれば概ね寛容派だ。

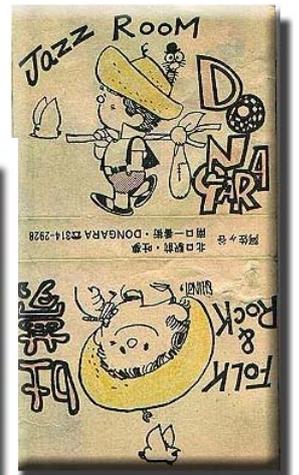
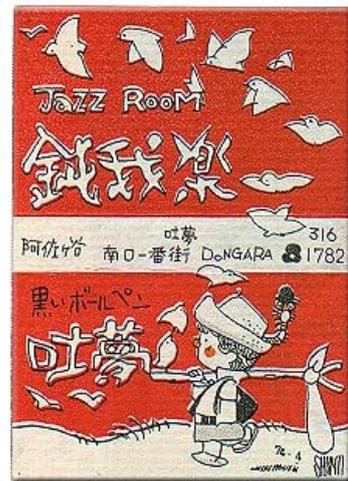
但し、喫煙しに席を離れなかなか戻ってこないのはかわりに電話をとることも多くいい迷惑だと思ふことはしばしばある。

さて収集対象としてのタバコであるが「タバコ」自体パッケージが収集対象となっており通常のパッケージの他、観光タバコやイベント・記念のデザインをあしらったものも多く販売されてきたので昔から収集家は多い。またサイズが決まっているため一時その彩を利用してクラフトなどにも多く創られ展示会なども開かれてきた。



ところでタバコといえばマッチ・ライターが必需品であるがマッチは今日のポケットティッシュ並に只でどこにでも置いてあるほど広告・宣伝に欠かせない品だった。買えば一箱5円か10円ぐらいいただろうがよほどの事がない限り買うことは無かった。マッチが激減した大きな理由は100円ライターの出現だが、家庭でも自動点火の器具が普及したことも大きな要素だ。昨今は禁煙運動のあおりを食って喫茶店でも置いてあるところは少なくなってしまった。要するに灰皿・マッチが置いてあること自体けしからんというわけだ。一時、喫茶店のマッチを中心に収集してきた自分としては行った先々の記念になるものが無くなり淋しいものがある。

「執筆者の素顔」には書かなかったが永島慎二の影響を受け作品の土壌となる新宿・阿佐ヶ谷・吉祥寺の街歩きや喫茶店巡りは以前からDOKU-GAKUに書いてきた。普通なら漫画家を目指すところだがうさおさんやCacco氏と違い絵を描く才能は無い。物を見ながらならある程度は描けるので当時、日美の通信教育で有名だったレタリングならいけるかもと思い独学で勉強し専門学校へ行くことも考えたがやはり才能はないし描くのが遅いので仕事にはならないと思い早々に諦めてしまった。



そういう経緯もありデザインには今でも興味があり紙もの（ポスター・案内状の類）を集める動機の一つになっている。前置きが長くなったが、今回はテレカの他にマッチのコレクションを交えて掲載したいと思う。

タバコのパッケージを模したマッチは種類も多くJTの前身、専売公社が作成したタバコ店で売られていたものがほとんどだが今も売っているかどうかは不明。喫茶店の中にはたばこの名前を店名にしている(していた)ところもあり写真



のようにマッチのデザインもパッケージそのままだ。「ハイライト」は御茶ノ水の中央大学のある辺りにあった店、店内は50～60年代のムードが残っていたが閉店してしまっただけで今はどこにあったかもおぼろ。「ピース」は、新宿駅西口の小田急ハルク1Fにある純喫茶。看板のロゴも50～60年代風のピースのデザイン。入り口側は前面ガラス張りなので待ち合わせに良い店。卓と椅子が大きく他は殺風景なのが特徴。いかにも商談に使われそうな感じで昭和の香りが残っている。残念ながらこのマッチも今はもう置かれていない。



ついでにタバコのデザインについて記してみたい。デザインという言葉が日本で使われ始めたのはピースが発端とされている。それまでは意匠、図案と呼ばれており「ピース」は昭和21年に日本の平和を記念して作られた。

当初は唐草の入った模様だったが外国のデザイナーの作品に似ていることから昭和27年に平和条約締結の記念としてデザインを変更。この時のデザイン料が破格だったこと、売上げが2年で5倍増になったことからデザインの広告的価値が世に広まるきっかけとなったそう。 「ハイライト(h i - l i t e)」も良く知られるパッケージであるがこれは和田誠の作品。喉ごしのキレを唄い文句に史上に残る怪物的大ヒットとなった。

ちなみに日本で初めてフィルム包装したのもハイライトでハイ(h i)はその後のあらゆる商品で高級感を持たせるための用語として使われるようになった。

自分が知っているたばこで最も古いのは「いこい」だ。茶というか黄土色のパッケージにいこいの文字と 休止符 ㄷ のデザイン、「生活の句読点」、「今日も元気だ。たばこがうまい！」はいこいのポスターのキャッチコピーだが今でもアレンジして使われるほどの名文句だ。父親はタバコを吸わなかったが親戚の叔父さんにはよくタバコを買いに行かされた。ニッケルの 50 円玉を手に 1 箱 40 円のタバコにつき銭が 10 円。これが駄賃になる。今思えば小遣いをくれる口実だったのかも知れない。

掲載のマッチを見てわかるようにタバコはかってご進物用の手軽な商品として利用されてきたのがよくわかる。自分も会社の営業所勤めをしていた時、中元、歳暮の時期になると所轄の警察署にタバコを持っていったことがある。30 年も前の事だ。最近ではコンプライアンス重視でこういったものは受け取らない傾向にある。

ついでながら昔はタバコを常備している家が多く来客にはお茶同様まずはいっぷく進める

のが礼儀であり、職人さんやちょっとした修理などで来た電気屋さんなどに一箱をちょっとしたお礼として使っていた。

かようにタバコは生活の中に文化として溶け込んできたものであり、数々の映画や小説などで名シーンが描かれてきた。今、禁煙運動は激しいものがあるがアメリカの禁酒法みたいにはなっていないもの。TVからタバコのCMが消えて久しいが最近では番組の中に喫煙のシーンがあるだけでクレームがあるらしい。おかしいのは「タラコ」を繰り返す歌の宣伝で「タラコ」がたばこに聞こえるというから冗談なのか本当の事なのかわからなくなってしまう。タバコが嫌われる理由は臭いと副流煙だがテレカをみてもわかるように 100% とはいかないが煙の少ない臭わないタイプへの開発が進んでいるので最後には 8 マンの吸う強化剤みたいになってしまうかも。

